

体験的な活動を通して、生きる力を培うキャリア教育の研究

—— 「総合的な学習の時間」を活用して ——

高校教育研究会議

芦澤 潤¹

川崎 操²

米丸 久美子³

佐藤 真一⁴

要 約

全国的な不況と就職難が続く状況下で、フリーターの増加や離職率の増加が社会問題となっている。川崎市の小・中学校では、職業調べや職業体験学習等のキャリア教育がはじめられている。このような状況をとらえ、中学校の進路に関する基礎的な学習の上に高等学校における効果的なキャリア教育が必要であると考え、研究を進めた。

本研究では、次の3つの柱を立てて研究を行った。

川崎市立高等学校を対象とした高校生の在り方生き方や進路に対する意識のアンケート調査を実施し、それぞれの実態を分析し、研究の視点を探る。

効果的なキャリア教育の指導方法を検討する。

職業体験学習を中心とする一連の体験的な学習を通して、生徒の生き方や進路に対する意識がどのように変容するか検証し、望ましい支援のあり方を検討する。

調査の結果、将来についての目標がある生徒は、高校生活が充実しており、前向きに生活できている傾向があることや、7割以上の生徒が職業体験学習を希望していること等が把握できた。そこで、一連の体験的な学習により職業観・勤労観を育成するための授業実践を試みた。授業実践前後の比較から、職業に対する考え方の深化を検証する。

キーワード： キャリア教育，職業体験学習，職業観，自己理解，コミュニケーション能力

目 次

主題設定の理由	70	6.一連の体験的な学習の前後における	
研究の内容	70	観点別項目ごとの調査比較と考察	80
1. 研究の仮説	70	研究のまとめ	82
2. キャリア教育のとらえ方	72	1. 研究の成果と考察	82
3. 研究の進め方	73	2. 今後の課題	84
4. 体験的な学習を取り入れた		参考文献	84
授業の実践と考察	75	指導助言者	84
5. 着目生徒の観察における考察	77		

¹川崎市立商業高等学校教諭（長期研修員）

²川崎市立川崎総合科学高等学校教諭（研修員）

³川崎市立川崎高等学校教諭（研修員）

⁴川崎市立有馬中学校教諭（研修員）

主題設定の理由

超氷河期と呼ばれる就職状況が続く中で、フリーターの増加や離職率が高まっている状況などが報道されている。本研究で実施した川崎市立高等学校 5 校の進路に関する意識調査からも、自己肯定感が低く、将来の目標が定まっていない生徒の割合が高い傾向がみられた。

新学習指導要領では、「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること」が求められている。さらに、高等学校における総合的な学習の時間の中では、学習活動の例として3点示されているが、本研究に関連するものは次の2点の(イ)「生徒が興味・関心、進路等に応じて設定した課題について、知識や技能の深化、総合化を図る学習活動」、(ウ)「自己の在り方生き方や進路について考察する学習活動」である。

このような活動によって、内容知・方法知・自己知を総合的に育てることが求められている。高等学校では、いわゆる出口指導に偏りがちな進路指導とは異なり、将来の在り方生き方を構想し自分の適性に見合った職業を模索させるとともに、望ましい職業観・勤労観を育成することが重要になる。あわせて高校生が生きがいややりがいのもてる学校生活を構築でき、自己の将来を考える力の育成を目指したキャリア教育を展開していかなくてはならない。

そこで、職業体験や課題解決的な学習によって、生きる力を培い、望ましい職業観・勤労観を一層育成することが高等学校における課題と考え、次のように主題を設定した。

体験的な活動を通して、生きる力を培うキャリア教育の研究

—— 「総合的な学習の時間」を活用して ——

研究の内容

1. 研究の仮説

(1) 高校生の現状

現代の高校生の置かれている状況は、以前と比較して大きく変化してきた。少子化や大学増設、入試形態の多様化等により、大学・短期大学の進学率が増加してきた。一方、就職希望者にとっては、長引く不況と産業の空洞化等により、求人数が激減し、希望の職業に就くことは厳しくなっている。

ベネッセ文教総研が2000年に実施した「高校生の自己概念と学力達成度」調査¹⁾によると、「将来について目標がある」と答えた高校生が46%で、1993年の文部省の調査と比較すると20ポイント低下している。このことから高校生の現状は、生きがいややりがいをもてずに、自分の将来に不安を抱いている生徒が増加している状況がうかがえる。

進路状況を見ると、就職率が低下している。不況と産業の空洞化の影響を受け求人数が年々減少して、平成13年度の求人倍率は過去最低を記録した。さらに、産業構造の変化に伴う就労形態の変化などにより、従来の高卒の中堅技能者の求人が減少したことで就職することが狭き門になってきている。このような状況下、厳しい就職戦線を早くから離脱してしまう生徒や、安易な気持ちで進学に流れる生徒が増加していると思われる。ミュージシャン・声優・パイロット等を夢見てきた生徒も、高

¹⁾2001年 『高校生の自己概念と学力評価』ベネッセ文教総研

校生になると、現実を考えざるを得ない状況にぶつかる。夢を実現する可能性を探ることで自己実現に向けての適切な支援の在り方を研究する必要性があると考えた。

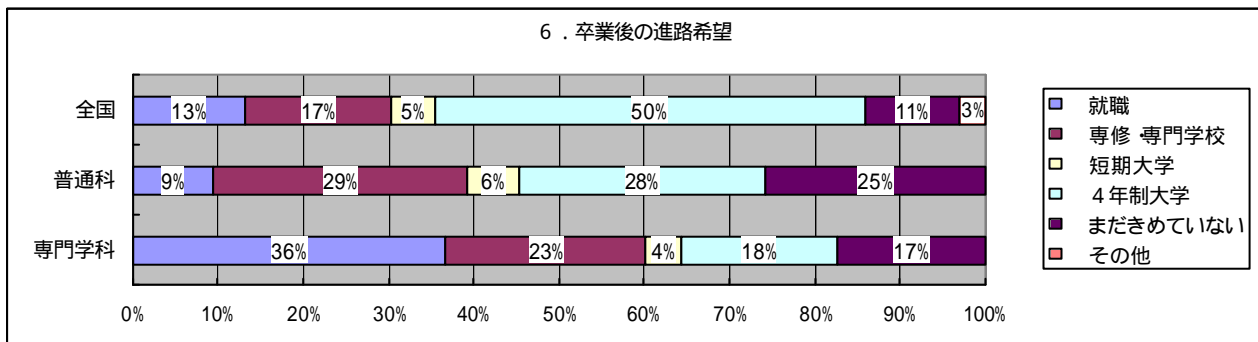
アルバイトをやりがいにしている生徒もかなりいるが、生活や学費のために働いている生徒は、むしろまれで、ほとんどは、遊興費の捻出のためである。また、電子メールによって、常に連絡を取り合っていないと不安になってしまう友達関係も、しっかりとした人間関係、信頼関係が作れないための行動と読み取ることができる。

このような状況の中で、将来の目標が持てない生徒は、高校生活にやりがいが持てずに安易な方向へ流されやすくなっていると考えられる。

(2) 川崎市立高校生の実態調査から

2001年に川崎市立高校で実施した調査データ(p.6参照)の中で専門学科と普通科の比較で差が見られた項目のデータと全国規模の調査データ(東北・関東・九州, 1都4県の公立高校7校の1・2年生対象, サンプル数1826, 2000年2月, 高校教育研究会調査)を比較してみた。自己肯定感に関する「5.-1今の自分が好きだ」の項目では、とてもそう思う まあそう思うの肯定回答の合計、すなわち肯定率が専門学科46%、普通科37%、全国48%であった。「5.-4将来の目標がある」については、肯定率が専門学科56%、普通科45%、全国57%であった。川崎市立高校においては、自己肯定感と将来の目標については、全国を下回る傾向にあり、特に留意して支援するの必要を感じた。

「6.卒業後の進路希望」について、普通科と全国の比較では、4年制大学の希望者が少なく専修・専門学校希望者が多いこと、また未定者の割合が大きく上回っていること等がつかめた。



クロス集計では、対人関係に関する項目で、自己肯定感が高く、自分らしさをもっている生徒は、集団での活動も積極的に取り組む傾向が見られた。また、将来の目標がはっきりしている生徒と、自己肯定感が高く自分らしさをもっている生徒の相関も見られた。

1年生と2年生の比較では、高等学校に入学して1年間を過ごすことにより、「1.学校でうちこめるもの」の項目で1年生64%、2年生50%で14ポイント、コミュニケーション能力に関する「5.-5グループ学習などでだれとでも話ができる」の項目で1年生62%、2年生53%で9ポイント2年生の肯定率が低くなっている。このような現状を踏まえ、授業のあり方を工夫して、生徒の関心・意欲を高めるための生徒への支援が必要である。昨年度の研究からも、調べ学習や課題解決的な学習等の参加型の授業を希望する生徒が85%いるが、実際は、あまり行われていない状況である。小・中学校で培ってきた「生きる力」を高等学校においてさらに深化・発展させることは、高等学校に課せられた課題であると考えられる。授業実践の方法を改善することや総合的な学習の時間を活用したやりがい探し、特別活動を活性化することでの居場所づくり等の手だてを講じることが、高校生活に積極的に取り組むようになるために必要な支援と考える。

「8.職業体験学習を希望する」については、肯定率が全体で74%、専門学科84%であった。将

来の目標や自己理解の状況に相関は見られず、体験によって適性や能力を知りたい、または職業の内容を理解したいといった希望がうかがえる。また、「9.-2 自己実現に向けての努力は必要」と答えながらも、「9.-1 日々を楽しく気楽に生きていきたい」と考える者が7割以上を占めている。

(3) 川崎市立中学校の職業体験学習の実態調査から

川崎市立中学校進路指導担当教諭対象のアンケートによると、7割弱の中学校が職業体験を実施している。体験後、「生徒の進路意識の高揚への効果」について、88%の学校が効果を感じており、「学校生活が前向きになった」と感じる学校が76%ある。「職業体験学習を実施して職業観の育成を目指してほしい。」といった高校への要望も寄せられており、やりがいを持ってない高校生に対して、将来を展望して充実した高校生活が送れるようになることを希望していると読み取れる。

(4) 仮説の設定

以上のような市立高校生の実態から、学校でやりがいを持てるようにするために、体験的な学習によって自己肯定感を高め、コミュニケーション能力を育成することが必要だと考えた。さらに、現実的な将来構想ができるようになるために、自己の適性を認識し自己理解を深めることが重要になるものと思われる。そして、希望する職業に就くためのプロセスを学び、職業理解を深める方法を知ることが職業を自己決定する際に必要な力であると考えた。

その後、職業現場に赴き自ら仕事を体験したり、その様子を見学したり、自己の課題を現場で解決することが重要と考える。

以上のように高校生の現状、各種調査等の結果を踏まえ、研究の仮説を次のように設定した。

仮 説

職業体験のための職業調べ、事業所探し、職業体験学習、発表会等の体験的な活動を取り入れたキャリア教育を通して、望ましい職業観・勤労観を育成することで生きる力を培うことができる。

2. キャリア教育のとらえ方

(1) キャリア教育の意義

中央教育審議会の答申でキャリア教育について以下のように定義されている。平成11年12月の初等中等教育との接続の改善について(答申)「第6章 学校教育と職業教育の接続」の「第1節 学校教育と職業生活の接続の改善のための具体的方策」の中で、キャリア教育の必要性が次のように提言されている。「学校と社会及び学校間の円滑な接続を図るためにキャリア教育(望ましい職業観・勤労観及び職業に関する技能を身につけさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育)を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある。」²⁾本研究においても、このような定義でキャリア教育をとらえていくこととした。この答申より、文部科学省では、インターンシップ総合推進事業・キャリア教育等進路指導改善推進事業によるキャリア体験推進のための関連施策を挙げ、都道府県教育委員会を通して各高校に積極的な取組を求めている。

また、望ましい職業観とは、「生徒が職業の意義や役割について十分理解するとともに、職業を選択するにあたって、自己の能力・適性等を生かし、社会に寄与するといった意欲、態度をもつこと」³⁾ととらえる。

²⁾1999年 中央教育審議会答申

³⁾1992年 文部省『個性を生かす進路指導をめざして』

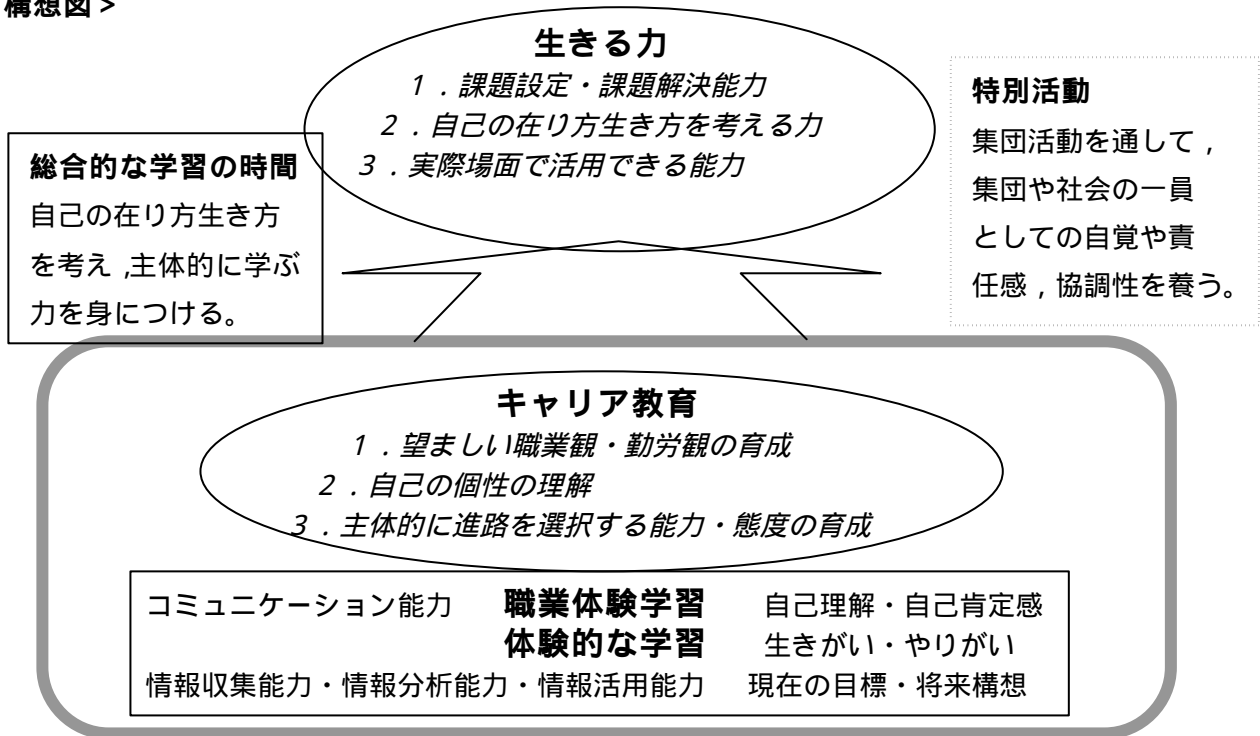
(2) 総合的な学習の時間におけるキャリア教育の位置づけ

新学習指導要領によれば、次のように総合的な学習の時間のねらいを掲げている。

「1) 自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。2) 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにすること。」⁴⁾

本研究では、自ら課題を設定し、主体的に課題解決できる能力を柱として、自己の在り方生き方を考える力、実際場面で活用できる能力を生きる力ととらえる。そして、人とのかかわりの基盤となるコミュニケーション能力や情報を活用する能力、その支えとなる自己存在感・自己肯定感や自己理解などを生きる力を培うための要素ととらえる。

< 構想図 >



この図は、キャリア教育について川崎市総合教育センターの平成 12 年度の研究をもとに本研究会議でまとめたものである。

(3) 総合的な学習の時間での取り扱い

平成 11 年の教育課程審議会の最終答申では、総合的な学習の時間で重視する点が次のように述べられている。中学校では、「情報の集め方・調べ方やまとめ方等の学び方の育成」と述べられており、一方、高等学校では、「生徒の生き方についての自覚を深め、進路展望を持たせる。特に社会認識の育成を通して、生徒の自己認識や自己理解度を高め、明確な進路展望を持たせることに主眼を置くこと」と述べられている。今回の研究では、生徒が自己理解を深め社会認識をはぐくみ、現在の在り方生き方を考えるとともに将来の生き方を構想し、主体的に学ぶ力を身に付けることをねらいとした。以下、総合的な学習の時間を活用して、学習計画を立案し実践することにした。

3. 研究の進め方

(1) 研究過程の概要 - 本研究では、以下のような方法で研究を進めた。

⁴⁾ 1999 年 文部省『高等学校学習指導要領解説 総則編』

< 実態調査 >	「中学校における職業体験学習の実態について」	4月下旬実施
	「事業所における職業学習(体験・見学)の実施可能性について」	5月下旬実施
	「高校生の生き方や進路に関する意識について」	5月下旬実施
< 事前調査 1 >	「高校生(専門学科)の生き方や進路に関する意識について」	5月下旬実施
検証授業	アポイントメント練習(職業人とのコミュニケーション能力の育成)	6月上旬実施
	コンピュータによる職業調べ(情報活用能力の育成)	6月上旬実施
	職業体験の受け入れ可能な事業所探し	
	1) 事業所探し(事業所探しの苦労体験による職業体験への意識の高揚)	6月中旬実施
	2) 事業所訪問(実社会でのコミュニケーション能力の育成)	6月中旬実施
	事業所訪問発表会(プレゼンテーション能力の育成)	6月下旬実施
< 事前調査 2 >	「高校生(専門学科)の生き方や進路に関する意識について」	7月上旬実施
検証授業	職業体験学習 15 の事業所において 2 日間実施	7月中旬実施
< 事後調査 1 >	「高校生(専門学科)の生き方や進路に関する意識について」	7月中旬実施
検証授業	まとめ	
	1) 職業体験学習の振り返り(職業体験学習の振り返りによる客観化)	7月中旬実施
	2) 職業体験学習発表会(他の発表からの職業観・勤労観の深化)	9月中旬実施
< 事後調査 2 >	「高校生(専門学科)の生き方や進路に関する意識について」	9月中旬実施
〔研究のまとめ〕	調査結果の分析・考察	10月～3月

(2) 実態調査の実施 - 以下のような方法で調査を実施した。

「中学校における職業体験学習の実態について」

対象：中学校進路指導担当教諭 51 名 時期：2001 年 4 月下旬 方法：川崎市立中学校教育研究会
進路指導部会の会場にて質問紙調査

趣旨：中学校での職業体験学習の実施状況や生徒の様子に関する内容の調査である。中学校での実
施状況と成果を把握した上で、高校での職業体験学習のあり方を考える。A 4 判 2 枚

「事業所における中学生・高校生の職業学習(体験・見学)の実施可能性について」

対象：川崎区の各企業 時期：2001 年 5 月下旬 方法：川崎区役所区政推進課より企業市民交流事
業推進委員会を通し、44 事業所に質問紙配布 回答数：16 事業所

趣旨：職業体験学習の実施可能性を把握するための調査で、職業体験・見学の内容、期間、人数等
の内容である。A 4 判 2 枚

「高校生の生き方や進路に関する意識について」< 資料参照 >

対象：川崎市立高等学校 5 校の 1・2 年生各 3 クラス 時期：2001 年 5 月下旬 方法：学校に依頼
した質問紙調査 回答数：普通科 565 名，専門学科 599 名

趣旨：生き方や進路希望，職業観に関する内容で，市立高校生の生き方や進路に関する意識につい
ての傾向を把握する資料とする。A 4 判 2 枚

(3) 単元の構想 - 実態調査結果より体験的な学習を取り入れた単元を構想した。

(4) 生徒の変容の分析 - 以下のような方法で検証授業実践による変容の分析にあたった。

一連の体験的な学習と職業体験学習の中で着目生徒の行動を観察し，生き方や進路についての意識
の変容を分析

振り返りシートの記述内容を分析

一連の体験的な学習の前後と職業体験学習の前後にアンケートを実施し，生き方や進路についての

意識の変容を分析 <資料参照>

対象：川崎市立A高等学校生活科学科1年生1クラス

時期：<事前調査1>5月下旬 <事前調査2>7月上旬(職業体験前)

<事後調査1>7月中旬(職業体験後) <事後調査2>9月中旬(職業体験発表会后)

方法：学校に依頼した質問紙調査 回答数：39名

趣旨：生き方や進路希望，職業観，職業体験学習に関する内容で，一連の体験的な学習や職業体験学習により生き方や進路に関する意識の変容を把握する。A4判3枚

職業体験学習の日誌・振り返りシートの記述の内容から生き方や進路についての意識の変容を分析

4. 体験的な学習を取り入れた授業の実践と考察

(1) 実践 - 6月から9月にかけて20時間の授業を実践した。

川崎市立A高等学校生活科学科1年生(全体20時間)

学習内容	ねらい	学習活動
アポイントメント練習 (1時間扱い) 6月上旬実施	<ul style="list-style-type: none"> ・事業所への依頼を想定した，敬語に留意したコミュニケーション能力の育成を目指す。 ・グループエンカウンターにより自己肯定感を育成し，職業体験学習への意識を高めるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・職業体験学習のグループで，アポイントメントのロールプレイング用のシナリオを話し合いにより作成する。 ・代表のグループがロールプレイングをクラスの前で演じ，よい点を評価して自分たちのシナリオの改善点を探る。
コンピュータによる職業調べ (2時間扱い) 6月上旬実施	<ul style="list-style-type: none"> ・情報活用能力(情報収集能力・情報分析能力)を育成するとともに自己の適性を認識し自己理解を深めるようにする。 ・希望する職業に必要な資格・試験や必要な条件を調べ，職業理解を深めるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・インターネットを活用し，自分の興味・関心等から適性を調べる。 ・自分のなりたい職業についてのプロセスや，必要な資格・試験等についての調査結果をシートに記入する。さらに，これからの現実的なプロセスを構想し，実現の可能性を検討する。
職業体験の受け入れ可能な事業所探し 1) 事業所探し (1時間扱い) 2) 事業所訪問 (放課後実施) 6月中旬実施	<ul style="list-style-type: none"> ・各種の情報を活用した事業所探しを体験することで，実社会の厳しさや苦勞を感じ取り，そこから職業体験学習への意識を高められるようにする。 ・実社会で必要なコミュニケーション能力や行動力を育成し，事業所訪問により体験内容を把握して，職業体験学習をイメージできるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各種情報誌やインターネットを活用して職業体験の受け入れを依頼する事業所を探し，アポイントメント練習を生かした電話での依頼を実践する。 ・事業所の責任者に面会し，職業体験学習の趣旨説明と受け入れを依頼する。さらに体験の内容や注意事項についての説明を聞き取り，必要事項をシートにまとめる。
事業所訪問発表会 (2時間扱い) 6月下旬実施	<ul style="list-style-type: none"> ・プレゼンテーション能力を育成するとともに他の情報を共有し，自己の職業体験学習の課題を設定できるようにする。 ・グループで協力して各種資料を作り，それを活用した効果的な発表ができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・事業所獲得までの苦勞した体験をグループで発表原稿にまとめ，各種の資料を作成し，グループごとのプレゼンテーションを行う。 ・他のグループの出来映えや工夫できている点を相互評価シートへ記入し，職業体験学習発表会の参考資料にする。
職業体験学習 (10時間扱い) 7月中旬実施	<ul style="list-style-type: none"> ・2日間の職業体験学習を通して職業人の仕事の様子を目の前で見学し，自らも職業を体験することで，職業観・勤勞観を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの事業所にて職業体験学習を行う。体験内容や課題解決・感想を日誌へ記入することで，日々の職業体験学習を振り返る。
まとめ 1) 職業体験学習の振り返り (1時間扱い) 7月中旬実施	<ul style="list-style-type: none"> ・職業体験学習の振り返りによって認識を深めることができるようにする。 ・他のグループの発表を聞き取ることに，自分の体験を客観的に振り返り， 	<ul style="list-style-type: none"> ・振り返りシートや感想文記述，礼状を作成することにより職業体験学習を振り返る。 ・グループで一人一人が職業体験学習の振り返りシートの内容を発表し，それに基づいて

<p>2) 職業体験学習発表会 (3時間扱い)</p> <p style="text-align: center;">9月中旬実施</p>	<p>気付かなかった職業観・勤労観についての新たな気づきができるようにする。</p> <p>・各種の機器を活用したプレゼンテーション能力を育成するとともに、職業体験学習に学んだ職業観・勤労観や課題解決状況の発表を聞くことにより体験した情報の共有化ができるようにする。</p>	<p>グループのシートにまとめ、発表原稿を作成する。</p> <p>・OHPやパワーポイント・ビデオカメラ・デジタルカメラ等の機器を利用した資料作りと、それを効果的に活用したグループごとのプレゼンテーションを行う。他の発表から職業観・勤労観についての気づきをシートにメモする。</p>
---	---	--

(2) 授業実践における生徒の様子と考察

川崎市立A高等学校生活科学科1年生の実践の展開例

アポイントメント練習

1) ねらい

- ・グループ内での話し合いによりコミュニケーション能力を育成するとともに、敬語の遣い方に習熟し、事業所への職業体験学習の受け入れ依頼をできるようにする。
- ・グループ活動により自己肯定感を高め、職業体験学習への関心・意欲が高まるようにする。

2) 授業の流れ

学習活動と内容	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> ・個人でアポイントメントの原稿を作成し、グループ原稿の検討をする。 ・グループ内で事業所に電話連絡のロールプレイングを行う。 ・一斉で練習の後、2～3のグループのロールプレイングを見て、よい点を参考に原稿の修正をする。 ・個人で振り返りを行い、グループとのかかわり方の自己評価をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・職業体験学習の趣旨・日程・人数・受け入れについて、アポイントメントに必要な項目を考えられるよう助言する。 ・事業所の方に対する敬語の遣い方や、声の大きさ、話す速さが適切であるかどうかグループ練習の中で相互評価する。 ・訪問する日時を復唱して確認できるよう支援する。 ・他のグループの発表を見て、よい点を発見できるように支援し、それを参考に自分たちの原稿をよりよい内容に仕上げる。 ・敬語の遣い方だけでなく、声の大きさや話す速さについてどうだったか、体験をさせていただき熱意が伝わったかを評価できるように支援する。

3) 結果と考察

アポイントメントの成功に向けたグループ内での話し合い活動や振り返りシートの記述から、コミュニケーション能力を育成するだけでなく、自己肯定感をはぐくむことができたと考えられる。

グループ発表の成果として、他のグループでのロールプレイングから新たな情報を得ることができ、自分たちの連絡内容で不足していた部分に気づくことができた生徒が多い。また、演じた生徒は他者からの評価を聞くことで、コミュニケーションへの自信が持てるようになり、自己肯定感をはぐくむことにもつながったと考える。話し合いでの発言が苦手な生徒には、自分の考えをまとめる時間を十分に確保し、グループ内での個人の発表の場を設定できるような支援の必要も感じた。

自分の力で体験学習のできる事業所を獲得しなくてはならないので、敬語や実務的な会話の学習を希望する生徒の声が多く聞かれた。このような機会をとらえ各教科の学習内容と関連を図りながら、その内容に弾力性を持たせることで、教科学習への意欲を向上させることにつながると思う。

コンピュータによる職業調べ

1) ねらい

- ・コンピュータを操作して、インターネットを利用した職業選択に関する学習は、情報収集・分析・活用する能力を育成する。さらに、将来の職業を選択するときの方法を知ることによって生涯にわたってのキャリア教育に活用できるようにする。
- ・コンピュータの操作による性格診断から、自己の適性や適職を参考に自己理解を深められよ

うにする。

2) 授業の流れ

学習活動と内容	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none">・将来やってみたい仕事や興味ある仕事をシートに記入する。・パソコンを起動させる。・インターネットで進学ネットの URL のページを開く。・自分の性格・適性、興味・関心から仕事を探す。・自分が就きたい職種名から仕事を探す。・いろいろな角度から自分に合った仕事を探す。・自分の将来に向かって、どのように行動していけばよいのかをワークシートに記入する。	<ul style="list-style-type: none">・現在やってみたい仕事を素直に記入するよう助言する。・コンピュータによる調べ学習が楽しくできるよう支援する。・インターネットによる適性診断ができるよう支援する。・仕事の知識を増やすことより、自分が今まで気付かなかったことが、発見できるように助言する。・これからどうしたらその仕事につけるようになるか、資格取得の方法や学習方法などをシートにメモするよう助言する。将来やってみたいと思っていた仕事に対する新たな発見や考え方の変化を確認して、シートに記入するよう助言する。・自分の希望する職業に必要な条件や資格を取得するには、卒業までにどうしていったらよいのか、卒業後何をすべきか、具体的な計画が立てられるように支援する。

3) 結果と考察

一人一人の生徒が、自分の性格や適性に基づいて自分のなりたい職業を調べることができた。さらに、適職が紹介されることで、とても興味を持って学習に取り組んでいた。コンピュータの操作に関して、インターネットを利用して細かい部分まで調べることができ、情報収集・情報分析・情報活用への興味・関心が高まった。インターネットの使用経験は、「何度もある」が 26%であり、今回のような詳細な調べ学習は大半の生徒が初体験であった。しかし、一人の生徒が1台のコンピュータを使用して、複数の指導者がついたことで、生徒の質問にスムーズに対応できた。

夢を追うことも大切だが、高校生にとっての進路は、自分の意思で決定しなくてはならないので、実現の可能性と必要な資格や技術・知識について、早い時期に情報収集・活用という支援をすることが重要である。それによって、自分の実現可能な目標が設定しやすくなると考えられる。さらに、目標に向かって努力しようとする意識ができ、具体的な計画も見えてくるはずである。このような支援は、自己実現させるために必要な資格・試験等の条件に気づかせ、新たな実現可能な目標の達成に向かわせることへつなげると考える。2001年8月のNHKでの10代のディスカッション番組の中で、「ゴールのわからないマラソンでは本気で走れない。」といった発言があった。将来の目標を設定できるようにすることで、学校生活の過ごし方は変わってくると思われる。

就きたい職業に迷っている生徒も見られるが、この後に予定されている職業体験学習の中で、自己実現の目標や手段・方法に気づかせながら、キャリア教育を進めていくことが重要になると考える。

5. 着目生徒の観察における考察

着目生徒の選び方は、次のような方法で行った。事前調査の結果から自己肯定感、自己理解、コミュニケーション能力、学校でのやりがいの各項目についての回答の状況を得点化(とてもある4点、わりとある3点、あまりない2点、ない1点)し、その合計(クラスの最高26点、最低12点、平均19.3点)の低い生徒を3人選んで考察した。その中の一人がAさんである。一連の体験的な学習と職業体験学習までの行動観察と振り返りシートの記述から考察してみる。

(1) 着目生徒の様子

< Aさんのプロフィール >

とてもまじめで、自分の将来や生き方について真剣に考えている。自己評価についても他の生徒と比べ自分に対する見方が厳しく、作品や提出物作りについて高い水準を求めている。

(2) 一連の体験的な学習での様子

内容	Aさんの学習活動の様子	考 察
アポイント練習	話し合いには参加しているが、発言は少ない。振り返りシートより「自分は、皆と話し合うことが嫌いで自分の意見を伝えることができなかった。発表では敬語がうまく遣えてあせらずに発表できた。今回学習したことは、使えることなのでしっかりやりたい。」	教室の前で演じたときも、落ち着いて敬語を遣ったロールプレイングをでき、他の生徒の評価も高かった。コミュニケーション能力の必要性は感じ取ったようで、今まで嫌っていた話し合い学習への意欲の高まりを読み取れる。
職調べ	感想より、「環境、牧業は自然と一緒に生活できてよいと思った。大学のことや仕事の場所などをもっと調べたかった。今日の体験はとてもよかった。」	職業調べによって、目標の実現に向けた意欲が高まり、現実的な将来像を構想できるようになったようだ。コンピュータ操作についての興味・関心も高まった。
事業探所し	感想より「指導者の方がとても優しい方で嬉しかった。体験学習をがんばろうと思う。」振り返りシートより「体験の日に職業についてのインタビューを計画する。」	事業所の責任者と面会するまでの不安感や緊張感を感じ取れる。指導者の人柄に安心した。インタビューは自主的に計画したもので、目的意識の深まりを感じとれた。
事業所訪問発表会	感想より「職業体験の依頼は、予想よりずっと大変なことがいっぱいあった。しかし自分の対応は、上手にしっかりできた。自分の新しい一面を発見できた。発表会では練習不足だが、つかえずに発表できて皆と協力できた。」	アポイントメントを取る苦労を体験し、事業所の方との依頼交渉もうまく対応できたことで、コミュニケーション能力に自信が持てた。事業所訪問の体験的な学習を客観的に振り返ることができ、自分の能力に新たな気付きができたと考える。
職業体験学習	振り返りシートより「指導者の方がこの仕事が好きだといっていた。仕事の様子やインタビューの表情がとても楽しそうに見えた。機械で指を切断した部分を見せてもらい、危険な仕事なんだと思った。インタビューで話を聞き取れることはうまくでき、失礼のないように対応するという個人課題は、達成できたと思う。」 集中して作業に取り組んでいたが、設計を変更し作業は遅れ気味であった。	職業選びの条件として、職業への適性と興味・関心の重要性を感じ取ったと読み取れる。安全面の注意点の中で「丸鋸盤で落とした指は元に戻らない」ことの事例を聞いて、安全への注意として緊張感と集中力が必要な仕事だと認識を深めたようだ。 個人課題に関しては指導者への対応をあげていた。インタビューは敬語を遣って質問することができ、達成感があったと受け止められる。
職業体験学習のまとめ	振り返りシートより、「一連の体験的な学習を通して得られたことは、「事業所の方への対応の仕方(自分の課題)と仕事を選ぶ基準は自分が何をやりたいかを重視すること。」 仕事のやりがい・意義について気付いた点は、「どんな仕事でも顧客のことを第一に考えていることがすごいと感じた。」 仕事の充実感を感じたところは「指導者の仕事に対する情熱や誇りを感じたことと、楽しんで仕事ができていること。」発表会からの気付いた点は、「どの職業もそれぞれやりがいや充実感を感じていると思った。」	時間を置いてから振り返ることで、自己の課題解決の状況を冷静に評価できたと考える。 仕事のやりがいや職業観について、グループでの意見交換により職業体験学習当時の記憶を呼び戻すことができた。さらに、他のグループの発表を聞くことで、職業観・勤労観についての社会認識をより深めることができた。 他のメンバーへ指示を出している。コミュニケーションがうまくとれるようになったことが、この要因と考えられる。また、全員の分担や発表の機会にも配慮していたと思われる。

(3) 考察

Aさんはコミュニケーション能力に関しての自己評価が低く、グループでの話し合いで積極的に意見を述べることは苦手であった。また、自己肯定感も低く事前調査の自己理解に関する項目も自分に対する評価が厳しかった。しかし、アポイントメント練習の授業で偶然に指名され、クラス全体の前でロールプレイングを演じた。言葉遣いやスキルについてのできもよく、クラスメイトの高い評価を得ることができた。この出来事でコミュニケーションに対する自信がついてきたと思われる。事前調査1と2の比較では、表1.のようにコミュニケーション能力に関する項目11.と自己肯定感に関する項目15.での得点が増加した。事業所との依頼交渉も積極的にできたようで、自分自身の新たな発見につながっている。また、グループのメンバーと事業所訪問までの一連の学習をともに経験したことで、自己肯定感も高まったと考えられる。

職業調べでは、大変関心を持って学習に取り組み、自己理解と職業理解を深めることができ、自己理解に関する項目16.での得点が増加した。希望する職業に就くまでの経過を現実的なものとしてとらえ、項目8.での得点が2得点増加したことからも、自己実現に向けての具体的な計画が見えてきたようだ。さらに、将来の生き方をも展望できるようになったと読み取れる。

職業体験学習では、木工所での体験学習が木工製品を製作する内容なので、本来のねらいが達成できるかどうか不安な部分があり、自らの判断で自主的にインタビューを行った。質問内容は、職業を選んだ理由や仕事のやりがい等の職業観に関するものであった。

指導者からの体験談を交えた作業上の説明により機械操作には資格が必要なことや、安全についての心構えと仕事の危険性についての認識が深まったようである。また、仕上げの段階で良い製品を作るためには、それぞれの工程を念入りにやり遂げることの大切さを認識できたと思われる。仕事への責任感、すなわち各工程での厳しい基準を持つことが、顧客の信頼に応えることを体得でき、これが勤労観の育成につながっていると考えられる。このようにして愛情を込めて製品を作る大切さと仕事のやりがいを実感できたようである。

インタビューから仕事選びの条件は、適性や興味・関心が重要であることが分かり自己理解の大切さを再認識できたと思われる。また、「お客様に喜んでもらうことこそが喜びであり、やりがいだ。」という話を聞き、職業観だけでなく生きがいややりがいについても学ぶことができたと思われる。

また、最近の木工業界の問題点として、産業のオートメーション化と空洞化で仕事が減ってきていること、コンピュータによる設計やロボットによる作業が主流になってきていることが説明された。このことは、自己の進路を考えるうえでの重要な情報となった。

職業体験学習発表会では、グループのリーダー的な存在となり、メンバーをまとめ適切な指示を出している。他者との意見交換を嫌っていたアポイントメント練習時と比較すると、格段に積極性が高まり自主的に行動できるようになった。この変容は、一連の体験的

表1.事前調査1と2比較 (得点)

アンケート項目	増加
8. 30歳の生き方を考える	+2
11. クラスとのかかわりができる	+1
15. 友達から好かれている	+1
16. 自己理解ができている	+1

表2.事後調査1と2比較 (得点)

アンケート項目	増加
10. グループで話し合いができる	+1
11. クラスとのかかわりができる	+2
12. 事業所との対応ができる	+2
13. 勉強が好き	+1
15. 友達から好かれている	+1
20. 体験でやる気がでる	+2
21. 進路に前向きになる	+1

な学習によりグループ内でのコミュニケーションをスムーズに取れるようになり、お互いの受容感が高まったことから自己肯定感が育ち、自信を持って自己の力を発揮できる環境がグループ内にできてきたことが要因と考えられる。

表2.のように事後調査1と2の結果から次のような変化があった。コミュニケーション能力にかかわる項目で10.11.12.の得点が高まった。また、項目13.15.がそれぞれ1点増加し、自己肯定感が高まったと考える。職業体験学習の効果に関する項目20.21.も高まった。

以上のように着目生徒の様子や振り返りシートの記述から、一連の体験的な学習の中で事業所探しによりコミュニケーション能力を育成し、自己肯定感をはぐくむことができ、職業調べにより職業理解・自己理解を深めることができたと考える。そして、2日間の職業現場での職業体験学習を通して望ましい職業観・勤労観をはぐくむことができたと考えられる。

6. 一連の体験的な学習の前後における観点別項目ごとの調査比較と考察

以下の から の比較を行い、結果を観点別項目ごとに分析・考察する（p6参照）

事前調査1と事前調査2の比較（以後、 の比較と書く）：事前調査1とアポイントメント練習から職業体験学習以前までの一連の体験的な学習を終えた時点の事前調査2の意識を比較分析する。

事前調査2と事後調査1の比較（以後、 の比較と書く）：職業体験学習前の事前調査2と職業体験学習を終えての事後調査1の比較で職業観や体験での意識を比較分析する。

事前調査1と事後調査1の比較（以後、 の比較と書く）：事前調査2の省略部分を比較分析する。

事後調査1と事後調査2の比較（以後、 の比較と書く）：事後調査1と発表会後の事後調査2の意識を比較分析する。

（1）コミュニケーション能力に関する項目

の比較で比較的大きな変化の見られたものは「12.事業所との対応ができる」で、肯定率が13ポイント減少している。アポイントメントの練習や事業所への訪問をして依頼交渉を体験した結果、初対面の事業所の方への依頼は、予想以上の難しさを感じ取ったと思われる。

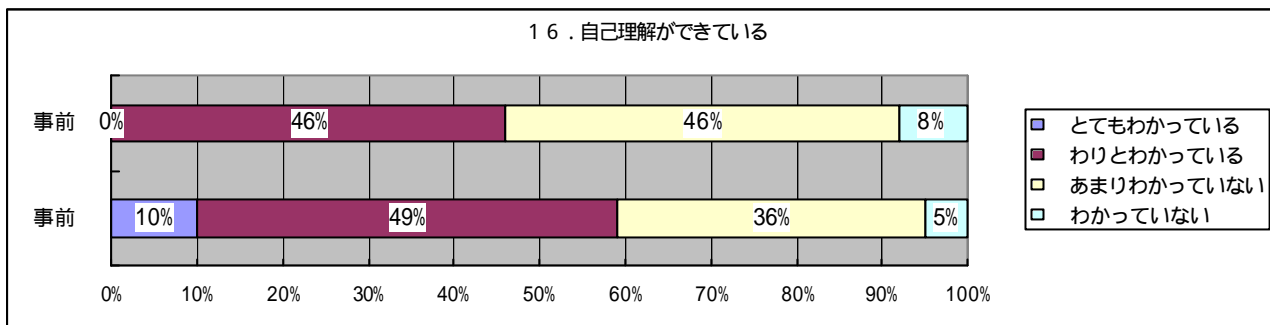
の比較で表3.のように「12.事業所との対応ができる」で、肯定率が29ポイント増加した。これは、職業体験学習を通して職業人とのコミュニケーションの経験を重ねたことにより、最も不安で不慣れな部分の課題を解決できた結果と考える。さらに「11.クラスとのかかわりができる」では、肯定率が10ポイント増加し84%になった。このことからグループエンカウンターを活用した一連の体験的な学習によって、グループ内での相互の受容感の高まりから自己肯定感をはぐくむことができ、コミュニケーション能力を育成できたと考える。

表3.事前調査2と事後調査1の肯定率比較（%）

アンケート項目	事前2	事後1	増減
11.クラスとのかかわりができる	74%	84%	+10
12.事業所との対応ができる	59%	88%	+29

（2）自己理解・自己肯定感に関する項目

の比較で「16.自己理解ができています」では、肯定率が13ポイント増加した。職業調べ学習をはじめ事業所訪問や発表会を通して、自己の能力・適性の理解がより深まったものと考えられる。特に、職業調べの授業を通して、自己の性格や行動から適性や適職の新たな発見ができたことが主な要因と考えられる。 の比較で自己理解の項目16.で肯定率が増加した。職業体験学習をグループのメンバーとともに振り返ることにより自己の能力・適性の理解が深化されたことが主な要因と考えられる。



(3) 職業観・勤労観に関する項目

表4.の事後調査1のように「17.社会や顧客に役立つ」では、肯定率が87%、「18.責任や誇りを持って働く」では、肯定率が100%と全員の生徒が肯定している。職業体験学習により職業人としての仕事に対する責任感や誇りを持って働いている様子を感じとることができた結果と読みとることができる。

また、「19.生活のために働く」では、肯定率が10%でほとんどの生徒が職業人の仕事への取組の様子から、仕事は生活のためだけではなく、生きがいややりがいを持って仕事に取り組んでいることを感じ取ることができたと読み取れる。

事後調査1より「31.体験学習に学んだこと」では、仕事の責任49%、仕事の厳しさ26%、仕事のやりがい56%、

仕事の楽しさ44%、学校と職場の違い36%、職場での礼儀33%、職場の人間関係18%という結果である。このような結果から職業人の仕事への取組の様子を肌で感じることができ、キャリア教育のねらいの一つである「望ましい職業観や勤労観の育成」に効果的であったと考える。

の比較で表4.のように項目17.の結果をみると、他のグループの発表を聞いたことで、職業観・勤労観や生きがい・やりがいについての社会認識を、より深めることができたを読み取れる。ただ「楽しかった体験」の発表だけに終わらないようにするために、発表会の視点を職業体験学習で学んだ職業観・勤労観におくように支援した結果、このように成果を共感的に受け止め、他者の体験を理解することができるようになったと考える。

(4) 学校生活や進路学習への取組に関する項目

表4.の事後調査1「21.進路に前向きになる」、「22.将来を考えるようになる」では、共に肯定率が84%になった。この結果から、一連の体験的な学習によって進路への取組がより身近なものとして認識できるようになり、将来を現実的・具体的に構想する力が育成できたのではないだろうかと考える。

の比較で「1.学校でうちこめるもの」の内容をみると、大きく変化したのは次の項目である。「2.資格取得」が28ポイント増加した。この要因として考えられることは、職業体験学習により資格取得者でないと操作できない機械があることや、調理・保育等の仕事でも資格が無いと従事できないものがあることがわかり、将来の自己実現のために資格取得の重要性を認識したことが考えられる。逆

表4.事後調査1と事後調査2の肯定率比較 (%)

アンケート項目	事後1	事後2	増減
1. 学校でうちこめるもの	80%	90%	+10
10. グループで話し合いができる	84%	87%	+3
13. 勉強が好き	46%	62%	+16
16. 自己理解ができている	57%	64%	+7
17. 社会や顧客に役立つ	87%	94%	+7
18. 責任や誇りを持って働く	100%	100%	0
19. 生活のために働く	10%	13%	+3
20. 体験でやる気ができる	62%	67%	+5
21. 進路に前向きになる	84%	87%	+3
22. 将来を考えるようになる	84%	85%	+1

に、「2. - その他（友達との会話，昼休みの遊びなど）」が21ポイント減少した。

の比較で表4.のように「1. 学校でうちこめるもの」では，肯定率が90%になった。その内容は，授業が15ポイント増加して28%になった。この回答率は，最も高い部活動が運動部と文化部を合わせて56%，資格取得36%に次ぐものである。特に専門科目や情報処理の授業に対する興味・関心が高まったことにより約3割を占めるようになったと考える。

また、「23. 一連の体験的な学習で進路を考える上でよかったもの」では，職業体験学習が69%の回答率になったのは，職場での体験学習から得た社会認識が，進路を考える上で大きな影響を及ぼしたものと受け止められる。そして職業調べが38%，事業所訪問が41%の回答率になっていることから，進路意識を深化させる方法として，実社会とじかに接触することやコンピュータを利用して最新の幅広い情報を活用するなどの体験的な学習が効果的であったと考える。

研究のまとめ

1. 研究の成果と考察

(1) 職業体験学習の有効性

着目生徒の様子や各種の調査から，次のような結果が見えてきた。事前調査1と2の比較では，前述の実態調査で明らかになった，生きる力を培う要素としてのコミュニケーション能力に関する項目と自己肯定感に関する項目での得点が増加した。事業所への依頼交渉や対応に自信が持てるようになり，グループ学習により自己肯定感も高まったと考えられる。また，職業調べでは，自己理解と職業理解を深めることができ，自己理解に関する項目の得点が増加した。事後調査1と2の比較でも同様に，コミュニケーション能力に関する項目と自己肯定感に関する項目の得点が増加した。さらに，職業体験学習の効果に関する項目が高まるとともに，自己の在り方生き方を考え，課題解決や探究活動に主体的に創造的に取り組むことができるようになった。このように総合的な学習の時間のねらいにそった3つの生きる力（p.5 構想図参照）を培うことができたと考えられる。

また，クラスの調査結果からも，職業調べにより自己理解の項目で肯定率が13ポイント増加し，能力・適性の理解を深めることができたと読み取れる。そして，職業体験学習を通して自己の適性や能力を発見するとともに，職業人の仕事の様子を身近に観察することができ，望ましい職業観を身につけ，勤労の意義を感じ取れた生徒が約9割いることがわかった。進路に関する2項目でも，共に肯定率が8割をこえた。このような結果から，望ましい職業観・勤労観を深化させ，自己理解をより深め，将来を現実的に構想する力を育成することができたと考えられる。

さらに，職業体験学習発表会を実施し，職業体験学習で学んだ内容をお互いに客観的に振り返ることで，キャリア教育の目的の一部を達成できたと考えられる。以上のように，生徒に現実から目をそむけさせずにやりがいと目的意識を持たせるには，実社会の現場での職業体験学習やその成果を深化・充実させるための体験的な学習が効果的な指導方法であることが検証できたと考えられる。

授業実践後の生徒は，社会見学の事前学習において学年でテーマをつくり，グループごとに課題「神奈川の食文化を探る」を設定し，調査発表する取組をしている。クラスの取組はとても積極的で，グループ編成でもお互いに声を掛け合ってグループを作り，自主的にコンピュータを活用して資料収集・分析をはじめている。さらに，事業所への調査依頼も自信を持って自主的に取り組み，グループ課題に対しては，安易な調査方法に妥協することなく，正面から取り組む姿が見られた。また，着目生徒は，グループの実質的なリーダーとなり，手際よく計画の立案や作業の分担を行い，自己の存在

感を認識するなかで主体的に調べ学習に取り組んでいた。このことは、同学年の他のクラスの取組と比較して一連の体験的な学習や職業体験学習の成果であると考え。

(2) 体験的な学習の実施方法について明らかになったこと

今回の体験的な学習により、自分の力で体験できる事業所を開拓したことで、実社会の厳しさや言葉遣いの重要性を認識し、体験への心構えができた。また、コンピュータを利用した職業調べでは、情報を活用するなかで改めて自己の適性や能力に気付き、自己理解を深めることにつながったと考えられる。そして一連の学習を発表し合ったことで、社会認識をより深化することができたと考え。

自己肯定感とコミュニケーション能力を育成する支援としては、課題設定や自己評価・グループ評価の際、まず自己評価をさせてからその発表をもとにグループ評価をさせた。あわせて発表会の準備として発表方法・作業分担等の計画立案も必要になり、他者とコミュニケーションをとらなくてはならない状況を設定した。この過程で各自の責任を果たすことにより、自己を受容し他者を受容できる人間関係が育成できたと考え。

次に、事業所の職業体験学習受け入れ可能性について考察する。川崎区役所を通じた川崎区内の44の事業所を対象に実施した調査では、受け入れ可能な事業所は3事業所であった。事業所にとっては、不特定の高校生に職業体験を受け入れることに対する不安があることがうかがえる。今回、生徒が事業所にアポイントメントを取り、事業所を訪問して責任者に直接依頼した方法は、職業体験をする生徒を直接確認できたことにより、受け入れを認めた事業所が多かったと考え。アポイントメントで「1, 2名ならできるが」といった、人数の条件で断られたケースもあった。

今回の職業体験学習では、生徒が希望する事業所の確保が十分にできなかったが、事業所の開拓は、学校をあげて年間を通して行い、事前に確保しておく必要性を感じた。今後、各校において職業体験学習の継続的な実施をしたり、実施日程の幅を広げたりすることにより、受け入れ事業所を拡大していく必要があると思われる。生徒が希望する職業を体験することで、学習の成果は確実に高まると考えられる。さらに、事業所にとっても経済的な負担の問題もある。また、インターンシップ保険と傷害保険の加入だけでなく、事業所への相応の費用も検討していかななくてはならない課題である。このように職業体験に関する諸条件の整備を各学校判断で実施していくことに、戸惑いと事故等への対応に不安を感じている学校の様子が見えてきた。

(3) キャリア教育の展開に向けて

キャリア教育については、小学校・中学校・高等学校の系統的な指導の必要性を感じる。まず小学校では、自己肯定感の育成が必要であると思われる。自分のよいところに気づき、他者と協調して自分の力を発揮し、コミュニケーション能力を高めることが望まれる。

次に、中学校では自分の長所・短所を知り自己理解を深め、さまざまな体験的な学習により自己の能力・適性を伸ばす。職業体験学習や職場見学で実社会の様子を感じ取ることで、将来の生き方を方向づけられるようにする。また、自己実現に向けてのプロセスや資格を調べることで、将来の職業の探索や基本的なプランができるようになることが望まれる。

さらに、高等学校では具体的な内容についての調べ学習や職業体験学習を経験することにより、自己理解や就きたい職業の検証を行う。そして、目標や計画の修正を行いながら自己の将来を現実的に構築し、職業を自己決定できる力を育成することが必要になる。職業体験学習は、1学年と2学年の実施が理想的で、1年生の早い時期から何の学習をどのようにがんばればよいのか、具体的な目標を持たせることが重要であると考え。1年生で短期間の職業体験学習を通して自己理解や適性の認識を深め、目標ができることにより高校生活をより充実できるようになると思われる。2年生で1年次

に自己実現のために計画・立案した進路計画を評価する。そこから検討・修正し、自分の就きたい職業での4～5日間の就業体験を通して、新たな目標を再検討できると考える。このように進路計画の立案については、暫定的なものから確定的なものへと発達段階を踏まえて繰り返し指導をする必要がある。

2. 今後の課題

今回の研究は専門学科において実施したが、サンプル数が少なく統計的な分析は不十分である。今後の課題は、次のように考える。第一に、普通科における多数の実践の積み重ねとその効果の検証である。実態調査より普通科の生徒に将来の目標が確立されていない割合が高く、体験を希望する事業所も多岐に渡ることが予想される。職業体験学習実施までの指導過程で、適性・能力を知る自己理解と将来の生き方の構想に一層重点を置くことが重要な課題となる。第二に、総合的な学習の時間におけるキャリア教育と関連させた各教科の年間指導計画の作成である。生徒の学習意欲を引き出し、学習効果を高めるためにも今後の重要な課題になると考える。第三に、中・高におけるキャリア教育の連携を検討することで、より効果的な指導計画が立案できると考える。

前述のように、我が国の産業・経済は厳しい状況にあり、高校生・大学生、教育関係者は、キャリア教育の取組に正面から立ち向かわなくてはならない。そのためには、教員は生徒の資質を磨き、生徒に明確な目標を持たせ、心身ともにたくましい生徒の育成に力を注ぐことが、重要な課題になると思われる。このような視点に立った実践が、幅広く展開されていくことを期待したい。

最後に、本研究を進めるにあたり、懇切にご指導いただいた工藤文三先生、調査にご協力いただいた各学校の校長先生方、また、職業体験学習を快く受け入れていただいた事業所の皆様に心より感謝しお礼申し上げます。

【参考文献】

文部省『個性を生かす進路指導をめざして』	海文堂出版	1992年
文部省『高等学校学習指導要領解説 総則編』	東山書房	1999年
牧 昌見編集『高等学校における総合的な学習の時間の課題と展望』	ベネッセ文教総研	1999年
中井 浩一著『高校が生まれ変わる』(教育現場からの報告)	中央公論新社	2000年
仙崎 武著『キャリア教育読本』	教育開発研究所	2000年
田中 勇作編集『課題解決力の育成を目指す教育』	ベネッセ文教総研	2001年
角田 浩子編集「キャリアガイダンスキャリア教育特集号」	リクルート	2001年

【指導助言者】

国立教育政策研究所基礎研究部総括研究官(川崎市総合教育センター専門員)	工藤	文三
川崎市教育委員会学校教育部指導主事	新保	利幸
川崎市総合教育センター研修指導主事	篠原	満